一、村の歴史

亀山郷と上郷の由来

亀山とは神山に由来し、神の御骸の鎮まり給うを語り同時に上山に通じている。

上郷は神の御ふるさと神郷から起り、上山近郷の漠たる呼称で、亀山は単に亀の群棲に因ってのみ起れる名称ではなく、其所には幾多の伝説と物語が織りなしているのである。

小櫃川の水源清澄は、神代の昔房総開拓の祖天富命のみすまいであられたと。故に其名も床しききよすみ、この一帯が神のみたまの鎮ります山即ち神山である。

神は上にあられ、何時しか上流山地の意に結びて上山となり、上山の亀は神のおしませ給う宝亀の伝説を生じ、此処に宝亀山の由緒を発し、始めて亀山なる文字の出現を見、後、宝亀山は蒲生山と変わり地名は釜生となったが、要するに亀が蒲になり或は釜に訛ったに過ぎない。

古来、この地の代表的氏神といわれる亀山郷惣鎮守不動尊（今日の亀山神社）、上郷大明神（今日の笹の山神社）に各郷名を冠せる誠に得たる哉である。

又今日未だ亀山を「カミ山」と発音し、木更津より小櫃の谷を順次上流へ押して「上郷」と言っているのも古伝證左の一つである。

（昭和十二年発行の田村實氏著書から）

上総国亀山郷村附短歌

（天保十三年九月比羅山人莞示斎玄鬼坊戯作）

上総なる、南山手の一郡に　夢よ宇坪よ、幼の
五穀も何も、望陀郡　頼り之通り、御しめりの
其の上上郷の、栄えこそ　雨古宿ぞ、嬉しけれ
千代万世乃、亀山や　如何なる時も、朝立に
人の心は、大輪（和）田に　稼に透は、見えぬなり
富田る家は、沢山にて　日は西野へと、傾けば
福貴自在に、向郷　何と篠宮（四ノ宮）恋し希連
肥たる馬に、狼煙がや　外ケ野無き身の、保満れには
旨きものなら、栗坪や　尊き法や、大山田
今宵はここに、一宿戸　余り鴫畑せぬがよし
上手の方は、芋久保か　追付浄土へ、稲滝か
何時も酒なら、大野宮　余所へ打路木、にくむなよ
台馬は居らねど、駒込よ　悪まぬ心、浮き浮きと
浮名、古滝と流しつつ　空飛呼を、鳥居台
只人心、平山や　一夜や松の、千本村
何れも腹は、大原台　天満宮を、拝しつつ
大原神社を、伏拝み　やつに柳瀬と、急ぎしが
誓をかけて、打過る　最早爰こそ、三本松
心は春に、阿らねども　暫く足を、休めむと
是より左起は、谷向　残すが誠、大事ぞや
唯何事も、大中と　柳城ともす、朝がよい
誰に逢うと（大戸）は、知らねども　気は高水に、せぬがよし
訳ある人に、小坂村　時は秋でも、紫の
浅間の宮に、詣でけん　花とぞ見ゆる、藤林
戸穴人とは、麻柄だ　野中の沢の、菅間田や
不実にせぬが、鹿の畑　降りしく霰、笹村に
蓮見切たる、心にも　音さらさらと、小平岱
片野無いなら、捨てておけ　太平楽の、御代とても
野原ても無き、事ながら　常に戴け、甲坂
桔梗刈萱、女喰（女郎花）よ　月日の御出、東谷
わるき縁とは、切畑に　かわは流れて、橋の台
心、細野のこと故に　兎角心は、片倉よ
人を頼母（田ノ面）と思込　気は清浄の、清水なれ
網場如何にと、気は関村　悪るく険しき、山の台
上関勢きに、下関の　末木揃えて、世を送る
悪しきことなら、余町むら　蘭麝の薫、香木原に
心、石崎大六も　臭い物には、ふ田代よ
人の中山、中直し　気も月毛なら、休らはん
刀根かく親に、孝尽せ　袋へ物を、押し込んで
君には忠義、第一に　川俣越えて、此処は亦
末の世までも、我名殿　若草川原、嬉しけれ
聞きしに、勝る三石の

観音菩薩に、詣でして
二世安楽と、祈りつつ
過行台の、坂畑よ
いつも上下の、難所道
加勢て行は、足腰に
骨折木沢、折もよく
滝原不動の、広前に
御代万代と、願かけし
我身の上の、心願も
皆蒲生よく、誓して
命長崎、稲ケ崎
屋敷の締りに、門生立て
また蔵玉を、建て並べ
生涯黄和田、能もって
四方木四海の、人招き
悪しき横尾の、災難を
祓い清めて、民安穏
田畑五穀、豊熟し
天下太平、国豊饒
日月清明、雨風は
時に順い、御代万々才登

行政の移り変わり

大昔のことについては、記録がないのでくわしいことはわからないが、笹にも、かなり古くから人が居住し、集団生活を営んでいたものと思われる。

八世紀頃の行政区分

畔蒜郡……美々郷…亀山・松丘地方
　小河〃…久留里・小櫃の東部地方
　甘木〃…久留里・松丘の西部地方
　新田〃…小櫃地方
　椅原〃…馬来田・平岡の東部及び中川地方
　三衆〃…馬来田の西部・中川の南部・富岡の東南部地方

望陀郡……畔治・表可・会戸・飯富・磐田・河曲・鹿津の各郷
周淮郡……山家・山名・額田・三直・丘田・湯坐・藤部・勝部・勝川の各郷
天羽郡……三宅・讃岐・長津・雨霑

8世紀頃の国・郡の分布図

支配者による統治の流れ

○明応六年三月（一四九七年）　里見安房守の領分
○天正八年九月（一五八〇年）　松平出羽守の領分
○慶長七年八月（一六〇二年）　土屋民部少輔の領分
○延宝八年一〇月（一六八〇年）　酒井雅楽頭の加増領分
○寛保二年七月（一七四二年）　黒田大和守の領分
○延享元年九月（一七四四年）　代官原新太郎支配
○寛延二年三月（一七四九年）　代官松平大和守の領分
○慶応元年　（一八六五年）　代官西尾隠岐守の領分
○明治元年十月（一八六八年）　菅谷県（県令柴山文平）
○明治二年六月（一八六九年）　領を廃して花房藩
○明治四年一一月（一八七一年）　郡県制度が定められる
○明治五年六月（一八七二年）　木更津県

天保年間に亀山郷六十四か村のとき、笹組三ケ村として、笹・香木原・野中で一つの組をつくっていたところから、明治五年の戸長の選出も、香木原・野中からもなされたものと思われる。

○明治六年六月（一八七三年）　木更津県・印旛県を合して千葉県が誕生、笹は、第四大区第十二小区に所属
○明治八年五月（一八七五年）　新治県を加え、今日の千葉県誕生　県令柴原和
○明治十年十一月（一八七七年）　戸長配置聯合町村の定めが布告された。

望陀郡　笹村外五ケ村　戸長宮野庄作

笹村加名盛村
大中村利根村
香木原村豊田
村役場印

当時の役場印
役場所在地　笹
この聯合村は、明治十七年七月まで続いた。

○明治十一年七月（一八七八年）　大小区制廃止

○明治十七年八月（一八八四年）望陀郡　折木沢村外九ケ村となる。当時の聯合戸長　朝生新之助

千葉県望陀郡
折木沢村外九ケ村
戸長朝生新之助

当時の戸長印

○明治十九～二一年頃　望陀・周淮・天羽の三郡聯合郡長の制があったようだ。
　当時の郡長は　重城保
○明治二二年四月（一八八九年）　町村制が施行され亀山村が誕生　四方木・黄和田畑・蔵玉・釜生・滝原・折木沢・坂畑・草川原・藤林・川俣・豊田・笹・香木原の十三区
○明治二九年三月（一九〇六年）　望陀・周淮・天羽の三郡が合併して、君津郡が誕生
○明治三四年秋（一九〇一年）　役場の位置が坂畑となる
　当時片倉・清水は笹区であった。昭和十六年頃　片倉・清水は独立の行政区となる
○昭和二九年十月（一九五四年）　久留里町・松丘村・亀山村が合併して、上総町誕生。（昭和二九年十月上総町誕生の際、亀山村の四方木は、分離し天津小湊町へ。
○昭和四五年九月（一九七〇年）　君津町・小糸町・清和村・小櫃村・上総町が合併して　君津町誕生
○昭和四六年十月（一九七一年）　君津町が君津市となり現在に至る。

當撰状

望陀郡笹村三拾八番屋敷平民
相川佐代吉
安政六年六月生

町村会規則ニ依リ笹村
会議員ヲ撰挙セシムル
処當撰ニ付笹村会議員
ト可被心得事
明治十七年九月一日
望陀郡折木沢村外九ケ村聯合戸長
朝生新之助　印

名主の役割

御　人　帳

いまの戸籍にあたるもので、この取り扱いは名主の仕事であった。なお、笹の名主は笹村だけでなく、いくつかの村も支配していたようである。

出　生

第六区二画　望陀郡笹村

十四番屋敷居住

農　宮野惣左衛門長男

宮野靏之助

八月二十九日　出生

壱　人　男

除　籍

第六区二画望陀郡笹村

三十番屋敷居住

農　野村治兵衛長女

よ　し

壬申年二十

八月十日当郡伊豆島村農地曳金左衛門

長男地曳栄治郎妻ニ差出候ニ付除籍

病　死

第六区二画望陀郡笹村

七十七番屋敷居住

農　本吉源治妻

○　○

八月三十日　病死　壬申年○○

総　計

入　籍　壱人

内

出生　壱人男

除　籍　壱人女

病　死　壱人女

不縁立帰り之事

一、□□□村佐右衛門女そめ　当巳二十三才ニ相成候○○○先年中央之□□□村長右衛門ヲ貰請候処　去九月中不縁ニ付双方熟談ノ上右長右衛門○○○立帰り相成候間　依テ当人別○○相除申候付御支配下御人帳ニ御書加へ可仕候為後日依而如件

蔵玉村　名主　○○○○

安政四丁巳年正月

笹村　御名主　庄左衛門様

明治五年庄屋や名主を改め戸長を置く
このとき、総代制もしかれた。

第六区二画
望陀郡笹村戸長
宮　野　庄　作
右のもの惣代に撰挙仕り候
明治五年壬申八月
望陀郡香木原村
唐　鎌　竹　吉㊞
鈴　木　市三郎㊞
唐　鎌　長之助㊞

第六区二画
望陀郡笹村戸長
宮　野　庄　作
右のもの惣代に撰挙仕り候
明治五年壬申八月
望陀郡野中村
座　間　六　平㊞
座　間　熊　吉㊞

笹村

（上総国町村誌明治二十二年刊行から）

維新前松平氏ノ領地タリ○戸数八十五人口五百四十二○牛十二馬五十一舟一○段別八百十町五段四畝二十四歩税金五百四円九十七戔一厘○氏神山神社字奥笹ニ在リ大山祇命ヲ祀ル明治十七甲申三月郷社ニ列セラル○寺彌陀山福満寺真言宗タリ

笹の起り

笹は篠とも書いた。其の名の起りは美々郷なるものの如く、美々郷の地たるや分明ならずと雖、笹の文字の用いられたる所以を考察する時、美々はミミと訓ぜられ変じて三三となり遂にササと呼ばれて篠となり遂に今日の笹に落着いたものと推定する。

美々が笹になったとすれば笹が美々の中心であったと云う事も考えられて来る。

（昭和十二年八月二十五日発行の田村実さんの著書による）

関東十九州路程便覧　嘉永元年（1848年）

笹の地質

笹川は景勝地、複雑した地層の宝庫として有名で大学生や一般の人が多く訪れていたが、亀山湖が出来たため残念ながら湖底に沈んでしまった。

二度と見ることのできない湖底の景ではあるが、せめてその一部でも記録にとどめ後世に残したいと思って書き記す次第である。

・貝の化石がたくさん出た車屋の坂（むかしの水車小屋付近）

第三紀には房総半島のほとんどが海底にあって、第四紀洪積世の頃激しい地殻の変動があって房総半島が地上にあがり陸地になったことを物語っている。

車屋の坂の岩石は水成岩であるが、かなりかたい砂岩で子どもの頃堀るのに苦労した。

・滝尻からドンドン付近までの川床は青岩の一枚板のようになっていた。

この青岩は泥岩といわれるもので第三紀につくられた岩石である。風化しやすい（トロケやすい）ので土台石にはならず井戸の内側に積み上げるのに使われた。

・ドンドンから上流にかけては、川床は洗濯板、川の両側の地層は縦になっていて断層も各所に見られた。
普通の地層はほとんどが平行に走っているが、たてに走っているということは、大規模な褶曲作用があったことを物語っている。

・湧き水や天然ガスが出た
岩の割れ目から多量の鉄分をふくんだ湧き水（通称カニミソ）があり、また、卵の白味のようになっている硫黄を多量にふくんだ水も出ていた。硫黄の臭いもかなり強かった。ヨコップチのところには茶水や天然ガスが出て川底から出る泡にマッチの火を近づけると燃えたものだ。さらに上流に進むと塩分をふくんだ水も出た。
わずかな地域に鉄、硫黄、ラジウム、塩類、そして天然ガスと、他に見られない温泉の宝庫があったが、湖底に沈んでしまったことは残念であるが、片倉の青山旅館が塩分をふくんだ硫黄泉を川からポンプで汲みあげて天然硫黄温泉として客へのサービスをしているのはありがたいことである。

エピソード

亀山全体としても地質学的に貴重なものがあり、黄和田畑に紀元前一〇〇万年の地層があることが学界誌に紹介されている。科学の学校という中学生向の学習月刊誌にもそのことが紹介された。
また昭和三十四・五年頃、ＮＨＫ（日本放送協会）から中学生対象の地層についての放映をしたいので協力してもらいたいと亀山中学校に取材班が来られたことがある。
なぜ亀山へ来られたかと聞いたところ黄和田畑の地層を目玉にしたいとのことであった。
しかし以前に調べたが学界誌に紹介された地点は年月がたっているため残念ながら見当らなかったため、郷台に褶曲、断層、化石層などがあるためそこを案内して撮影し帰りがけに高水の鉄道切り通しを撮影して帰ってもらったことがある。